

二つのまなざしの向かう側

及川俊哉

NHK広島制作の番組「悲しみから逃げない」没後70年原民喜の言葉」について書きたい。この番組は二〇二一年五月八日にNHK広島で放映され、その後全国放送された。

番組はお笑い芸人・作家の又吉直樹と作家の梯久美子による対談と、俳優の橋本愛による原民喜の作品「鎮魂歌」の朗読という内容で構成されていた。また後半では福島市在住の福島大学名誉教授澤正宏が「鎮魂歌」にからめて東日本大震災後の福島の実状を語るという形式で、広島と福島という二つの被災地が結び付けられて番組化されていた。

原民喜の「鎮魂歌」は、『群像』一九四九年八月号に掲載された作品である。全編が意識の流れ（本文では「念想」と呼ばれている）を語る、独特な独白文体で表現されている。原爆投下後の焼跡の凄惨な光景が脳裏に焼き付いている「僕」は、「原子爆弾記念館」に行き、「マスク」と「函」からなる「装置」を装着し、「原爆直前の広島市の全景」を見る。そしてその後の惨状を追体験する。

この「装置」について考えてみたい。この「装置」はさながら現

代のヴァーチャル・リアリティと、それを体験するためのゴーグルのようにも思える。七十年以上前にこうした技術を想像している原民喜の予見性の鋭さには目を見開かされる。また、その内容が原爆投下の再現であることにも驚かすはられない。この「装置」について「僕」自身は次のように述べている。

（厭らしい装置だ。あらゆる空間的角度からあらゆる空間現象を透視し、あらゆる時間的・速度的あらゆる時間的進行を展開さす呪ふべき装置だ。恥づべき詭計だ。何のために、何のために、僕にあれをもう一度叩きつけようとするのだ！）

（『定本原民喜全集』第二巻所収「鎮魂歌」より）
ここにはかなり複雑なジレンマが表現されているように思う。原爆投下や東日本大震災のような悲惨な出来事があった場合、それをメディアによつて伝達しようとしたとき、それが悲惨な出来事への記憶を想起させる不快な情報として受け止められることがある。それを原民喜の言い方に従つて「呪ふべき装置」性と呼んでみよう。これは文学のみならずテレビ番組などの映像メディアでも同様であ

るし、ヴァーチャル・リアリティでも付随してくる性質であろう。

現に震災直後の東日本大震災後は津波の映像が反復して報道されることに「共感疲労」や「フラッシュバック」を起す場合があるとしてSNSなどで注意喚起がなされていた（最近の東北の震災番組では「3秒後に津波の映像が流れます」などとテロップが出るようになった）。原民喜自身も「広島のことばもう沢山だ。どうして僕は原子爆弾のことはかり書いたり考へたりするのだらう。」（「長崎の鐘」と書いている。私は詩人としても活動しているが、実作者としての立場から述べると、「装置」の描写は、原民喜の意図としては、原爆投下後の凄惨な光景を目の当たりにしたPTSDから生じる「フラッシュバック」からの逃れ難さを、そのような用語も概念も無い時代に、読者になんとかわかつてもらおうとする努力から生み出された「発明」であるようにも思う（PTSD」という用語は日本では阪神淡路大震災の以後に広く用いられたように記憶している）。原民喜の内面では「感情的には原爆の記録を書くことに嫌気がさしていたとしても、思考としては肯定している」「一方の感情としては嫌気がさしていても、もう一方の感情としては書きたくてたまらない」というような複雑な葛藤があったのではないか。

また、読み手の問題もある。先に述べたような「共感疲労」の問題は、ある意味では被災の事実を真剣に受け止めようとするから起こる問題であるだろう。「共感できる／できない」という二つの事項の間には無数のグラデーションがあり、その項目の後に「だから読む／読まない」などという項目のグラデーションが続けば、さらに複雑な順列組み合わせのバリエーションが生じてくることになる。原爆投下などの大きな悲惨な出来事を伝達することに

は、こうした様々な複雑なジレンマや葛藤を対象としなければならぬ難しさがある。

さて、以上のような課題意識を持つていたため、今回の番組は非常に興味深く見る事ができた。番組中、原爆の被害はあまり直接映像化されずに、間接的・暗示的に表現されていた。たとえば、「鎮魂歌」の朗読を橋本愛が行なう場面では、登場人物は橋本愛だけであり、その前に立てられたトルソー（衣装をディスプレイするためのもの）を見ながら朗読がなされていた。十体程のトルソーは橋本愛に正対するように設置され、朗読する橋本愛のまなざしを向けられることであたかも原爆投下によって亡くなった死者たちのようにも思えてくる。あるいは、橋本愛は今脳内でまざまざと原爆投下後の被害者の群れを見ているのだらう、ということが読み取れる仕掛けになっていた。間接的・暗示的表現によっても、大きな悲惨な出来事を伝達することがある程度可能だという、これは、NHKの演出家の一つの解答例なのだろうと思ひ、興味深く視聴した。

番組中に震災後の福島で「鎮魂歌」を読み続けている人物として澤正宏が紹介される。特に説明なく登場しているので、私から補足すると、澤正宏は第四十一回原爆文学研究会で講話を行うなど本会とも交流があるとのことである。また、澤正宏は私の恩師でもあり、ツイッター詩「詩の礫」で震災後注目を集めるようになった詩人と合亮一の師でもある。そのため、久しぶりに恩師の講義を聴くようなつもりで視聴した。

澤は震災後福島には「二つの時間」があると述べる。一つは「震災を忘れようとする時間」であり、もう一つは「震災を忘れてはいけないとする時間」である。これら二つの時間に引き裂かれる中で、

大きな悲惨な出来事を忘れずに（あるいは逃れられずに）書き留めている「鎮魂歌」が参考になると述べる。また、澤は友人の画家菅野浪男のもとを訪れる。菅野は震災前まで牧場を経営しており、放射線被害によつて成牛を殺処分せざるを得ず、子牛は手放さざるを得なかった。その子牛の顔を描いた絵が番組では紹介されていた。やはりここでも「子牛のまなざし」が視聴者の想像力をかき立てるものとして選ばれて放映されていたように思う。子牛の瞳がまるでいわさきちひろの絵の中の子供の瞳のように思えた。橋本愛のまなざしの先に広島の様子が想像されるのと同様に、子牛のまなざしの先にも震災後の被災地の悲惨さが想像された。放射線や、その被害に苦しむひとびとの心情は目に見えない。しかし、これを可視化（可想像化）する手段として、「子牛のまなざし」はとても有効だったように思う。

今回のこの番組の作り手の意図としては映像メディアが「呪ふべき装置」になることを自覚的に最小限にとどめることにあつたように思う。またその上で、又吉らのコメントにより、「呪ふべき装置」を生み出さざるを得ない原民喜の内的必然性を伝えることにもとてもよく成功していたように思う（真に「呪ふべき装置」であるのは原爆や原爆を使用しようとする軍事力やその背景にある政治・経済などであるわけで、その意味では原民喜が「鎮魂歌」において「人類最後の生き残り」の人物の独白を描いている事は重要であると思われるが、煩雑になるので、ここではそれを指摘するだけにとどめておく）。

澤は原民喜の苦衷を推察して「他者の苦しみまで背負うことの苦しみ」と「他者の苦しみを背負わなければ生きていく意味がないのではないか」というアンビバレントな感情に引き裂かれる苦しさが

あつたのだらうと述べる。私自身としては、たとえば東日本大震災の被害を原民喜のように引き受けて創作することは難しい。あるいはある時期はできたとしても継続していくことはかなり困難であろうと思う。それは自分の精神的負荷としてもそうであるし、先に述べたように、作品に「呪ふべき装置」性が付きまとう構造的な困難があるからでもある。しかし、今回この番組を視聴し、考察することで、或るヒントをもらったようにも思う。それは、間接的・暗示的表現の可能性である。むしろ直接的・明示的表現も大切ではあると思う。ただ、大きな悲惨な出来事を対象にした場合、その伝承の持続可能性を考えたときに、さまざまな表現を選択していくことが大切なのではないかと感じた。私自身もがきながら手探りで創作をしている状況ではあるが、こうした番組のように広島・長崎と福島を連携させていくことが深まっていけば、お互いの知見から学ぶことも多くあり、相互に有益なのではないかと感じた。